

新千葉・本千葉 歴史散歩

●登渡神社（とわたりじんじゃ）

<https://yahoo.jp/VILUXQ>

京成電鉄の新千葉駅から海側の線路沿いに東京方面へ少し戻り、千葉公園方面から来る道で踏切を渡り、坂を下ると千葉街道に出る。ここは60年前には海岸線だった。坂道に貼り付くように建って海を見下ろしているのが、通称「のぶと神社」とも言われる「登渡（とわたり）神社」。鳥居を潜るとすぐ足元に測量基準点の標石があったので国土地理院の地形図で確認したら、海拔8.7mとなっていた。桓武平氏平良文の孫である平忠常が東庄の大友城を拠点として上総・下総を押さえていたので、これを以て千葉氏の流れの起点とする見方があるが、それから四代を経て、大治元年（1126年）に常重が千葉氏を始めて名乗ったことから、これを初代当主とする見方が一般的らしい。そこから数えて幾星霜、末裔である登戸（のぶと）権介平定胤が、祖先を供養するために正保元年（1644年）に千葉妙見寺の末寺として、妙見大菩薩を奉り白蛇山真光院定胤寺を建立した。当初は登渡妙見寺と言われていたが、明治に入り神仏分離令により登渡神社となった。この時千葉妙見寺も千葉神社に変わった。また現在の「登戸（のぶと）」という地名の由来を遡ると、元禄時代の資料に「のぼと」「のぼと」などの表記が残されており、「つくばねのみねのあらしをふきおろすふじのなみまをのぼりとふね」という歌が地名の起こりに深く関与しているという情報も見つかった。「登渡→登戸」「のぼりと→のぼと→のぶと」などの変化の道をたどったようである。

参道も本殿も南東を向いて建っており、周辺の地形から考えると昔は袖ヶ浦の入江に面して建っていたようだ。八坂神社・金刀比羅宮・阿夫利神社等が境内末社として祀られており、稲荷神社・水神社・浅間神社なども配されている。また、富士講の記念碑や船主による航海安全祈願の石柱などもある。

●白幡神社（しらはたじんじゃ）

<https://yahoo.jp/qSiOIF>

登渡神社の前の交差点から房総往還の名残と思われる真っ直ぐの道を蘇我方面へ進むと、白幡神社前という交差点があり、海側に曲がると白幡神社がある。現在の住居表示は新宿一丁目となっているが、亥鼻城を中心とした時代に海辺に切り拓かれた新田だっという情報を目にした事がある。そんなこともあって、新宿白幡神社とも呼ばれていたらしい。

時代を遡ると、この辺りは結城野と言われ、浜辺は結城浜と言われていた。新宿一丁目二丁目の地図を隅から隅までチェックすると「結城野ビル」という建物があり、新宿小学校の校歌の中には「虹見れば結城野の昔なつかし」という一節がある。

白幡神社は結城稲荷大明神とも呼ばれていた。白幡神社の創建時期は定かではないが、治承4年（1180年）石橋山の合戦で平氏に敗れた源頼朝が再挙を目指して千葉常胤を頼って亥鼻城を訪れた時に、結城稲荷の境内に源氏の白旗を掲げて陣を置き、旗をひとつ奉納したことから白旗神社と呼ばれるようになったとの言い伝えがある。明治になってから神社名は白幡神社に改めた。

●結城浜（ゆうきはま）の戦い

千葉氏の開祖と言われている千葉常重は、平常晴から相馬郡を譲り受けて相馬郡司となり、大治5年（1130年）に伊勢神宮に寄進し相馬御厨が成立した。

保延2年（1136年）、官物未納を理由に下総守藤原親通に召し上げられてしまう。

康治2年（1143年）源義朝の介入により、藤原親通の子である藤原親盛から取り戻したが、佐竹義宗に奪い取られるなど、下総の豪族千葉氏と公家藤原為光や常陸国の武士佐竹氏との間で御厨や荘園の所領を巡る争いが続くことになる。

藤原親盛の子藤原親政は、千田荘（現在の多古町）を領家として下総匝瑳に進出して、両総・常陸の武士団を率いて下総に進出を図る。親政は伊勢平氏とは深い姻戚関係にあり平氏政権の要にあった。これらの動きによって千葉氏は苦況に立たされることになった。

治承4年(1180年)以仁王の挙兵に続き源頼朝は伊豆で挙兵したが、石橋山の戦いで平氏に敗れて、真鶴から海路を安房に逃れ、当時上総一帯を押さえていた上総権介平広常のもとに赴く。頼朝は広常・常胤のところへ使者を送った。

そして千葉常胤は、苦況からの脱出を目指して源頼朝を助けることで起死回生を図るという賭けに出る。そして、孫である千葉成胤が藤原親政を破るという快挙を成し遂げ、坂東の武士が源頼朝側に付く糸口となった。この戦いを「結城浜の戦い」と言うようだが、残されている文献により細かな部分の記述に異なりがあり、史実の検証が難しいらしい。

「結城野」は新宿町周辺の昔の地名で、しかも鎌倉時代以前からのものであることがわかった。しかし、「結城」という地名の由来については少しばかり調べてみただけではわからなかった。千葉氏が登場する前は下総の国で、今の茨城県の結城あたりまでが含まれていたため、結城氏との関係があるのか、さらに歴史を遡ることになるのか。時間の関係で、この疑問は棚に上げておくことにした。

●神明神社(しんめいじんじゃ)

<https://yahoo.jp/8mhTm0>

白幡神社前の交差点を蘇我方面へ進むと神明町に入る。海側の住宅地の中に神明神社がある。神社の起源は定かではないらしいが、ご神木のイチョウの木は樹齢900年を越えるものらしい。

神明神社は全国各地に数えきれぬほどに存在する神社で、天照大神を主祭神とし、伊勢神宮内宮を総本社としている。土地によっては通称として「お伊勢様」と呼ぶところも多い。

前述(白幡神社の項)のとおり、この辺り一帯は結城野と言われていたことから「結城神明神社」という呼び名もあったようである。現在も神明町という町の名が残っているため、この地で長く栄え慕われていた神社に違いない。

●君待橋(きみまちばし)

<https://yahoo.jp/4eRAUq>

本千葉駅を海側(西側)に出て、千葉方面に向かって歩くと「君待橋」という交差点に出る。交差点をやや千葉寄りに進むと都川に架かる君待橋がある。君待橋のひとつ下の大橋のもとにある港町交差点の角の緑地に「君待橋の碑」があり、説明が書いてあった。

治承4年(1180年)海を渡って来る源頼朝を千葉常胤一族が出迎えた。頼朝が橋の名を問うと常胤の子胤頼が「見へかくれ八重の潮路の待橋を渡りもあへず帰る舟人」と詠んで答えたという言い伝えがあるのだが、頼朝が千葉亥鼻城に向かった経路が海路だったか陸路だったかは定かではないらしい。この間の経緯についてはいくつか他説もあるようなので、真偽の程は不明のようである。

●王子神社(おうじじんじゃ)

<https://yahoo.jp/jYRj13>

君待橋を右岸に渡り、下流に向かうと最初の橋が大橋。大橋を過ぎて数十メートルほど進むと川沿いに建つ一戸建てや集合住宅の間にひっそりと王子神社が建っている。神殿は道路から見ると90度回った立ち位置になっていて、明らかに海に向いて建っているようだった。入口に「王子神社」と標石がありはするものの、由緒を記したものは何も建ってはいない。川沿いに建つ家の中には釣り船屋らしい色あせた看板が残っている家もあるので、海が遠くなる前はここから釣り船が出ていたようだ。

●龍蔵神社(りゅうぞうじんじゃ)

<https://yahoo.jp/OJZDs9>

君待橋と外房線・京成千原線の線路の間の住宅地の中に龍蔵神社がある。住宅地の間に囲まれるようにひっそりと建つ神社は、立派な石の鳥居の奥に本殿がある。海津見(わだつみ)の神を祭神とした村社のようなのだが、由緒の表記はなく詳細は不明。海を前にした集落の守り神だったにちがいない。インターネットで調べてみてもそれ以上の情報は得られなかった。鳥居は北北西に、本殿は東北東に向いており、海辺の村の社なのに海に向かって建っていないのが気になった。

●巖島神社(いつくしまじんじゃ)

https://yahoo.jp/s9_2Ho

大橋を渡って港町交差点を蘇我方面へ進み、細い路地を通り過ぎて次の角を右に曲がると巖島神社港町弁財天がある。住宅地の間に辛うじて残された空間という雰囲気だが、ことのほか広いしっかりとした造りになっている。本殿の手前に「弁財天は学問技芸の神」と書いた看板があり、奉納された合格祈願の絵馬が沢山かけてあった。

江戸時代に、寒川村の半農半漁の村人達が豊饒を願って小さな祠を建てて弁天様を祀ったのが始まりであると由来が記されていた。本殿の裏手に回ると、ジオラマのように造られた巖島神社があり、静かに水音が聞こえていた。

●諏訪神明神社（すわしんめいじんじゃ） <https://yahoo.jp/vuzfXE>

大橋から蘇我へ向かう道に戻り対角の区画に入ると、港町自治会館の脇に細い踏み跡のようなものがあり、人が住んでいないと思われる破屋の奥に諏訪神明神社があった。一m四方にも満たないような小さな神殿は、荒廃から守るつもりで造ったらしい杉板を打ち付けたような鞘堂(?)の中にあった。諏訪神社(建御名方神)と神明神社(天照大神)を祭神としているようだが、隙間から覗いても何も確認出来なかった。海に向かって建っており、民とともにあったことを感じさせる。

しかし周辺の景色を見ると、見捨てられた海辺の集落という空気が漂い、少々哀れな顛末という感じがしてしまう。敷地の奥に建つ大きな立派な石碑の「日露戦争戦没祈念」の文字だけが威風を放っているように感じた。

都川の右岸には神明町という町名があり、神明神社がある。この寒川の神明社との関係が知りたかったが、インターネットで調べてみてもわからなかった。

●寒川神社（さむがわじんじゃ） <https://yahoo.jp/xIliKp>

諏訪神明神社の前をさらに蘇我方面へ進むと、大きく立派な鳥居と「寒川神社」と書いた看板が導いてくれた。この辺りは昔は寒川村と言われていた。

天照大神・寒川比古命・寒川比売命を祭神としており、延喜式神名帳にも記載があるとのこと。相模国にも寒川神社があるが、相武国造と千葉国造が連携した海上安全の神として崇められていたと言えぬがある。しかし、この地では「寒川(さむがわ)」と読み、相模の国では「寒川(さむかわ)」と読む。

●光明院（こうみょういん） <https://yahoo.jp/TnagEV>

寒川神社に隣接する区画で寒川小学校の西側に光明院という寺がある。正式な名称は、真言宗豊山派海詠山光明院神明寺という。この地は寒川仲宿と言われて寒川村の中央部だった。

寺の名が神明寺というのは面白いが、起源などの詳細は不明とされている。本尊は不動明王、寒川神社の別当寺だったらしい。

●海津見神社（わだつみじんじゃ） https://yahoo.jp/8_BGck

京成千原線の線路に沿って車が一台通るのにぎりぎりのような細い道が蘇我コミュニティセンターあたりまで続いている。地図を丁寧に眺めてみると、君待橋あたりと一本の線で結ぶことができそうな感じがする。おそらく昔の街道で、後に里道として残ったものと考えられる。

細い道の海側には古くからあるような家並みが連なりその途中に海津見神社がある。家と家の間に挟まれて辛うじて残された空間のような所である。フェンスで囲まれており中へ入ることはできなかった。名前を見ても明らかなように、海上安全を願って祀られたものと思う。

太平洋戦争末期に、山本五十六の命により沖合を埋め立てて国産の戦闘用航空機製造工場が造られた。終戦後川崎製鉄に生まれ変わり過去は消えてしまった。埋め立てられる前はこのあたりは海苔の生産や漁業で生計を立てる漁村だった。

●稲荷神社（いなりじんじゃ） <https://yahoo.jp/gWkL3k>

寒川神社の前の道を南へ進むと海側から来る京葉線が道路を跨ぎ、町は寒川町から稲荷町に変る。

道の東側に建つ稲荷神社が、町の名の由来になっている。創建時期は不明らしいが、日本武尊が東征で上総へ向かう時に、馬を放ってこの地の神に必勝を祈願したことから、この地は駒ヶ原と言われた。

そして駒原神社として豊受大神を祀ったという言い伝えがある。千葉常兼が亥鼻城に居を構えた時に守護神として崇敬した。治承4年(1180年)に源頼朝が太刀一振りを献上奉納したという言い伝えも残されている。海に向かって建つので、海の安全祈願をした社だったと思われる。

●おわりに

千葉駅から蘇我方面へ、旧海岸線に近い所を南下する旅を試みた。

都川を渡って港町・寒川町に入ると風景が一変することに気がついた。古いものが残ってはいるが、住んでいる人や家あまり多くないようで、「荒廃」に近いものを感じた。

産業構造の変化？ 人口の急減？ 海辺の町はどうなってしまったのか、またこれからどうなっていくのか、気になった旅だった。



<参考情報>

「千葉さんの家系図調査」

(千葉氏の誕生と千葉六党の流れ)

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/chibasan.pdf>